

隣の国にお邪魔します。

韓国 お茶とお菓子の旅

池田亜季
藤原祥代

が上手で、バスから見える風景をギャグを入れ込みながら紹介してくれる。一時間ほどで建物がたて込んできた。

ソウル市内観光

初日はツアーに同行して、南大門市場と新羅免税店へ。

南大門市場では、屋台のトッポギを買って食べた。最初は甘くて香ばしいが、後から辛さがくる。でも、日本人でも食べられる辛さだった。その後、韓国海苔屋さんでは石榴茶を飲ませてくれた。赤いジュースみたいで、とても飲みやすかった。ぜひ、このお茶を買って帰ろうと思った。

新羅免税店では、私たちは化粧品に夢中になってしまったが、先生はちゃんと韓国の菓子や茶の下調べをしていた。伝統菓子（韓菓）の詰め合わせが売られていたそうだ。

その後、夕飯にプルコギを食べに行った。韓国に来てから初めてのちゃんとし



■（上段）南大門市場にて。（下段）仁川空港。

今年は、山陰のかまぼこのほかに、韓国の伝統的なお茶とお菓子の試食会もやるうという事になった。そこで、どう

せなら実際に韓国に行って、自分たちで調達しようという事になり、私たち池田亜季と藤原祥代が、鹿野先生と共に韓国に行く事になった。今回の旅は、二泊三日のパックツアーに参加して、二

目を自由行動にしてもらい、そこで試食会の材料を買うことが目的である。

六月三日（初日） いざソウルへ

午前九時、短大に集合した私たちは、先生の車で米子空港へ向かった。出国手続きを済ませ、一二時発のアシアナ航空

機に乗り込む。アテンダントはみな韓国人。飛行機に乗った瞬間から、そこは異国だった。機内食を食べ終わって、気づいたら亜季は寝ていた。実は亜季は、風邪をひいてのどの痛みを訴えていた。ぐっすり寝て、風邪がよくなっていたらいいが。一時間半ぐらいで、仁川空港に到着。アジアのハブ空港だけあって、でかい！米子空港とは規模が違う。飛行機から降りて、空港の建物の中に入ってからトイレを済ませた。韓国のトイレは、ペーパーを流せない。ごみ箱にペーパーを入れないといけないのだ。私たちは、ここで最初のカルチャーショックを体験した。

無事に入国手続きを済ませ、預けた荷物を受け取ってから大きな自動扉の外へ。私たちは、早速「円」を「ウォン」に換金し、ツアーのメンバーと合流した。ガイドさんに名前を呼ばれ、全員が揃ったところで、小型バスに乗り込んだ。

バスは、高速道路に乗って一路ソウル市内へ。ガイドの具さんはとても日本語



■プルコギ。

た料理。私たちはテンションがあがっていた。しかし祥代は、緑色の切干大根を目にしたとたん、食欲をなくしてしまった。それに比べて先生は、何でもおいしそうに食べていた。

夕食後、ホテルへ直行。ホテルは明洞にあるニューオリエンタルというホテル。建物は古いが部屋は結構広くて、ゆったりと休むことができた。

六月四日(二日目)

朝八時にホテルを出発。バスでソウルの歓楽街と言われる梨泰院(イテウォン)に移動して、「シゴルパブサン」という庶民的な料理屋で朝食を食べる。この後、ツアーのみんなは北村韓屋村や梨泰院などを観光することになっているが、私たちは仁寺洞でバスを降りてもらった。仁寺洞では、旅の目的である韓国伝統の韓菓や韓茶を探す予定である。さあ、これから私たち三人だけの旅が始まる。



■夕飯のブルコギのおかず。

■ナツメ茶。



■五味子茶。

北仁寺の喫茶店

仁寺洞は、朝鮮王朝時代には貴族(両班、ヤンバン)たちの屋敷が立ち並んでいた。いまでは、骨董店だけでなくギャラリーや伝統工芸品の店が並び、「文化の街」として知られている。ここはまた、韓茶の喫茶店やお土産店が多いことでも有名だ。

先生は何回か来たことがあるらしいが、亜季も祥代も仁寺洞は初めて。時刻は午前九時ごろで、まだほとんどのお店はシャッターが下りている。とりあえず、仁寺洞通りを南から北へ歩いてみる。まだ朝早いのに韓国の学生たちがいっぱいいて、ワイワイしている。

仁寺洞通りの北の端の方まで来て、喫

茶店らしきお店を発見。雰囲気も良さそうだし、お洒落なお店だったので、私たちはここで韓茶を初体験することにした。

メニューにはたくさんのお茶の名前があり、迷った末に柚子茶(ユジヤチャ)と五味子茶(オミジヤチャ)を飲みたそうに目覚めないうらしく、コーヒータを注文した。

柚子茶は、ユズの皮と実を刻んで砂糖漬けにしたものを、お湯に溶かした飲み物である。ビタミンCが豊富で美容にも効果があり、女性に人気の伝統茶である。実際に飲んでみて、ユズの香りがしっかりとっていて、甘みがあつて美味しかった。

五味子茶は、スイカや梨などの果実を浮かべたジュースのようなお茶である。水を浮かべて飲むので体温を下げる効果があり、夏に飲むことが多い伝統茶。このお茶は見た目が赤く、酸味の中に甘さがあり、フルーツの味がしっかりとっていた。

チルシルでの教訓

韓茶を飲み終わると、再び韓菓を探して南へ歩き出した。途中で若者に人気のシヨッピングモール、サムジシルを見つけたが、十時開店ということで入れてもらえなかった。そこで、次の目的地である「チルシル」へ向かった。

チルシルは間口が小さかったので、私たちは少しガツカリしたが、一歩店内に入ると目の色が変わった。入口のあたり

に韓菓が陳列してあり、なんとその中に、私たちが探していた韓菓の詰め合わせがあったのだ。箱の中に色とりどりの韓菓が詰めてあり、それを上品な色の布で包んでくれる。お菓子の種類と量、そしてその値段と美しさが気に入って、私たちはこれを買って帰ろうと決めた。

チルシルは、トック(餅)で有名な店である。トックの賞味期限を聞くと、「一日です」と言われたので、私たちはトックを日本に買って帰ることはあきらめた。その代わりに、私たち自身が味わって帰ることにした。

ところがまだ朝早いので、トックが店に届くにはあと三〇分かかるとのこと。そこで私たちは、他の店をひやかして時間を潰し、再びチルシルに戻ってきた。すると、なんとということか「韓菓の詰め合わせが、たったいま売り切れた」と店員が言うではないか。私たちは「オーマイガー(ゴッドのこと、亜季の口ぐせ)」



■シゴルパブサンの庶民的な朝食。

■梅実茶。



■トック。

となり、買う時買わないといけないうと痛感した。残念！

チルシルでの成果

チルシルは、奥の方が喫茶店になっている。私たちはそこでトックと韓茶を味わった。店頭で各自好きなトックを選び、テーブルに座ってから、先生はナツメ茶（大棗茶、テチュチャ）、祥代は梅実茶、亜季は桑葉茶を注文した。

ナツメ茶は、ナツメを煮たものに蜂蜜や砂糖を入れて煮込んだお茶である。スライスしたナツメと松の実などが入っていて、甘く濃厚な味。ビタミンCが豊富なお茶である。黒く濁っていて見た目は悪いが、黒糖のような感じで甘く、最後

に苦味が残る。

梅実茶は、梅の実の蜂蜜漬けを煎じたお茶である。実際に飲んでみると甘酸っぱい味がとても濃く、アルコールなしの梅酒を飲んでみるみたいだった。一瞬で体が温まった。

桑葉茶はシンプルなお茶で、とても飲みやすかった。独特の匂いで豆の味がした。水筒のような入れ物にお湯が入っていて、自分でお茶を入れるようになっていた。

トックはどれも色合いが美しく、サイズも丁度良くて美味しかった。亜季が食べたピンクのトックは、シナモンがまわりにしっかりとついていて、甘さ控えめで見た目もかわいく、お洒落だった。ごま味のトックには三種類の黒豆が中に入っていて、日本では味わえないような独特の味だった。

サムジキルでのリベンジ

チルシルを後にして、私たちは「サムジキル」に向かった。

サムジキルは、二〇〇四年にオープンしたショッピングモールで、四階建ての建物に七〇以上の店舗が入っている。韓国の伝統工芸品や雑貨のショッピングだけでなく、グルメやアート鑑賞もでき、韓国の若者にも人気のスポットである。

サムジキルの一階の広場で、私たちは韓菓が屋台で売られているのを見つけた。ビニールの袋にたくさん詰められて、いかにもお買い得といった感じである。

チルシルで韓菓を買い損ねた私たちは、これに飛びついた。

その屋台では、三種類の韓菓を買うことができた。菓葉は、茶色くてしっとりしていて、ドーナツみたいな味だった。菓葉は、白くて少し長細い菓葉。柔らかく上品な食感で、少し歯にまとわりつく感じが残る。カンジョンは、韓国風の栗おこしといった感じのお菓子である。

韓菓を入手した私たちは、半分肩の荷が下りたという感じで、ちよつとサムジキルのお店を覗いてから、次の目的地へ向かった。

ロッテ百貨店

次に、どこで韓茶を買いおうかと考えて、ロッテ百貨店へ行くことにした。地下道から地下の食品売り場に入ると、そこは人でごった返していた。韓国人だけでなく日本人も多い。地下にはフードコートもあり、お昼時だったのでランチをしている人も大勢いた。

食品売り場で韓茶を探したが、お手軽な詰め合わせが見つからなかったので、私たちは一〇階の免税店へ行くことにした。

免税店へたどり着いて、グッチやシャネルなどの高級店の中から何とか韓国土産コーナーを見つけ出し、ようやく石榴茶、柚子茶、梅実茶、五味子茶のセットを購入することができた。粉末タイプもあったが、私たちは液体タイプの詰め合わせを買うことにした。ナツメ茶が気に



■サムジキルでの購入品。

入っていた先生は、セットに入っていたかったナツメ茶を別に買っていた。

南大門市場から明洞へ

ようやくミッションを成し遂げた私たちは、南大門市場と明洞でショッピングを楽しむことにした。

亜季と祥代のお目当ては、化粧パック。いろいろな店に行つた結果、南大門市場のパックが一番安いということが分かったのだ。そこで、もう一度昨日のお店へ行こうとしたのだが、南大門市場はムチャクチャ広かった。南大門のすぐ近くにあったことを思い出した先生が、案内所で地図をもらつてきて、やつと見つけることができた。亜季と祥代は無事にパックを買い、先生は高級韓国海苔の大量を購入した。

その後、徒歩で明洞へ。土曜日ということもあり、ここも人が多い。亜季と祥代はまだまだショッピングをする気満々で、お疲れ気味の先生とはここから別行動をとることにした。もう夕方の五時に



■仁川空港のロビーにて。

なっていた。

亜季と祥代は夕食をとることに。石焼ビビンバの写真があるお店に入ってメニューを開いたら、鉄板チャーハンしかない。まあ美味しそうだしいいかと、一番ベーシックなチャーハンを選んだ。初めは余裕だと思ったが、そのうちに衝撃的な辛さが襲ってきた。もう無理と思い、少しでも辛さを紛らわすためにチーズを投入したが、何も変わらなかった。こんなはずじゃなかったのに……。しかし、私たちは、笑いながら食べていた。悲惨な体験なのに、なぜかそれが面白かった。明洞での買い物満喫して、私たちはホテルに帰った。二人とも夕食を食べた気になれず、帰着報告かたがた先生の部屋にお邪魔した。先生はチヂミをお持ち帰りしていたので、それを分けてもらっ

た。ゴマ油の味と野菜の味がさっぱりしていて、私たちは美味しくいたいた。

六月五日 (三日目)

最終日は再びツアーと合流。朝食はアワビのお粥。その後、清溪川を散策してから、仁川空港へ。定刻の十二時三〇分に飛行機に搭乗。亜季と祥代は行く時より元気で、韓国の景色を眺めながら旅の振り返りをしていった。先生は爆睡。米子空港に無事着陸。懐かしい風景が私たちを待っていた。たった二日しか経っていないのに、日本食が恋しかった。

韓国には、伝統のお茶やお菓子がたくさんあった。韓茶は、日本と違って木の実や果実を使ったお茶が多く、味も色もさまざまだった。韓菓にも木の実がたくさん使っており、保存が効くように油で揚げたりする工夫がなされていた。また、韓茶や韓菓には漢方(韓方)薬的な要素が強くある。こんなところまで「医食同源」が行き渡っていて、お隣の国なのに日本とはかなり違っている。



■試食会の様子。

この旅では、韓国の伝統のお茶とお菓子について学ぶために韓国を訪れたわけだが、その他にも行ってみたいとわからないことをたくさん学べた。トイレや交通事情などのちよつとしたことからカルチャーショックを受けたが、なんといいっても食べ物から受けるショックが大きかった。日本では考えられない色や匂いや味に、つい「アリエナ



イ」と思ってしまふ。でも、そこで止まってしまうと、結局、異文化を否定してしまうことになる。そこから異文化の中に飛び込んでゆく勇気が、異文化を楽しむためには大切なのだということを知ることができた。

未知の世界に行くことは、新たな可能性の発見につながる。そこには、楽しいことばかりではなく苦しいこともあるが、その苦しさを味わい、それを乗り越えることによって、自分の成長を実感できる。そんな刺激こそが、異文化の魅力なのだ。

今回の旅は、そんなことを考えさせてくれる旅だった。これからもいろんな国に行つて、もつともつと刺激的な旅がしたい！ そんな力を与えてくれる良い旅となった。

(いけだ・あき／文化資源学系二年生)
(ふじはら・さちよ／文化資源学系二年生)



■ラクロスのトウモロコシ畑にて。

一大決心！ アメリカ一人旅

恩田 淳子

のぼります。当時高校生だった私は、外国に強い憧れを持っていました。「外国の人と話したい、外国のことを知りたい」——そんなふうに思っていたとき、ちょうど私の住む松江市八雲町（当時は八東郡八雲村）で、第一回の八雲国際演劇祭が開催されることになりました。

昨年で四回目となった八雲国際演劇祭とは、八雲町で三年に一回開催されている演劇祭で、もちろん外国からも劇団がやって来ます。宿泊施設の少ない八雲では、期間中、劇団員は町内の民家に滞在します。輸送から劇場内の誘導に至るまで、すべての運営がボランティアによって支えられている演劇祭なのです。

これは外国の人と触れ合える大チャンスと思い、「どうしても参加したい!!」と家族を無理やり説得し、我が家はホストファミリーになりました。そして、そのときに出会ったのが、アメリカ中西部に位置するウイスコンシン州のラクロスという町から来た、ビルとトムでした。

我が家初めての外国人宿泊に、「ご飯は？」「布団は？」「お風呂は??」と家族全員が大騒ぎでした。背の高いトムは鴨居に頭をぶつけ、おじいちゃんのビルは床の間に腰かけたりと、お互いに毎日カルチャーショックの連続でした。日中は彼らも芝居をしたり、観劇したりと慌ただしく過ごし、一週間のホームステイはあっという間に過ぎていきました。

けれど、そんな中でも毎日夜遅くまで本当にいろいろな話をしました。お互い

昨年の夏、私はビルというおじいちゃんに会うため、一人でアメリカへ行ってきました。彼と再会を果たすまでには、本当に、本当にいろいろなことがあり……。そんな彼との出会いから結末までのいろいろをお話したいと思います。ビルとの出会いは今から十年前にさか



■ 10年前、第1回八雲国際演劇祭でホストファミリーを引き受けた我が家。前列左からビル、トム、祖母。後列左から母、伯母、姉。

の家族のこと、演劇のこと、それに、ちょうど同時多発テロが起きた年だったため、ビルと私の祖母はそのことについても話をしていました。祖母は片言の英語とジェスチャー混じりの出雲弁での会話でしたが、不思議と会話が成立していたのを覚えています。

会いに行かないと!!

あれから十年。毎年、家族の誕生日やクリスマス、新年には手紙を交換してきました。メールの使えないビルと私のやりとりは、ずっと手紙でした。いつかもう一度会いたい、会いたいと思いつながら、行動に移せないまま十年が過ぎてしま

ました。

ところが昨年、大きな転機が訪れました。何気なくインターネットのサイトを見ていたとき、偶然、何年も連絡の途絶えていたトムの名前を見つけたのです。「もしかしたら……」と半信半疑でメッセージを送ってみると、返ってきた返事は間違いなくトム本人!! 数年ぶりの便りはとて懐かしく、ワクワクしながら読みました。けれど、その中にとても気になる一文がありました。

「実はビルが入院しているんだ……」

「会いに行かないと!!」——私はすぐにアメリカ行きを決断しました。

でも、決断したのは良かったのですが、なにしろ初めての一人旅。しかも海外。何から進めれば良いのか全く分かりません。母親の説得、航空券の手配……。行くためにはいろいろな問題がありました。とにかくまず初めに、ビルに手紙を書くことにしました。

「どんな具合なの? 会いに行こうと思うけど泊めてもらえないかな?」

二週間後、返信が届きました。病気にことにはあまり触れてなくて、「会いに来てくれるのは嬉しい。けれど、小さなアパートなので泊めてあげることにはできない」と書いてありました。

「どうしよう……。泊まれる所がなくなつた。ホテルも探さなきゃ……」

またひとつ問題が増えました。でも、あきらめなくなつた私は、もう一度ビルに手紙を書きました。

「泊る所を探して、会いに行くから」
いつもならすぐに返ってくる返事が一週間待っても二週間待っても返って来ず、とてもとても嫌な予感がしました。

ツイてる! ツイてる!

そんなとき、久しぶりに高校時代の友人に会う機会がありました。彼女はワーキングホリデーで海外へ行った経験もあるので、相談してみることにしました。

「私、一人でアメリカへ行こうと思ってるんだ」

「アメリカのどこへ?」

「きつと知らないだろうけど、ラクロスって町」

「えっ!? ラクロス? 知ってるよ。ワーキングホリデーで出会った友だちが住んでるの。トニーといって、家族はラオス出身で……」

冗談ではなく、本気でミラクルだと思いました。今までラクロスという町を知っている人にさえ出会ったことがなかったのに、そこに住んでいる知り合いがい

るなんて。さらに彼女は続けてこう言ったのです。

「今からその友だちに泊めてくれないか聞いてみよう!」

そのあと、すぐに三人でネット電話をしました。見ず知らずの日本人が急に泊らせてくれ」と言っているにもかかわらず、結果……快くOKをもらい、その日のうちに宿泊先が決まってしまうた。

ツイてる! ツイてる! 最高の気分
で帰宅した私は、母にそのことを伝えました。しかし、母はあまり良い反応では



■ (右上段) ラクロスの空港出口。(右下段) ラクロスの街並み。(左) ラクロスの公園にて。大きな先住民の像の前で。



■ (上段) トニーの家にはウェルカムボードが……。 (下段) トニーの家族と一緒に。

ありませんでした。まさか、本当に私が行くとは思ってなかったのでしょうか。

「大丈夫なの？ ビルとは連絡が取れているの？」

実は、ビルとは一カ月以上連絡がとれていなかったのですが、「大丈夫」と私は嘘をついてしまいました。

Welcome to La Crosse

ビルとは連絡が取れないまま、母には嘘をついたまま、出発の日を迎えました。夜行バスに乗りこみ、母に見送られて初めて、「ああ一人で行くんだ」と改めて寂しくなりました。「大丈夫かな、私……」——なんて、しばらくは思っていました。さすが楽天的な私。あつという間に眠りにつき、目が覚めると東京でした。

早々に成田空港へ移動して、いよいよ出発です。トラブルのため予定よりも約二時間遅れでの出発になりましたが、隣の席の外国人男性と時々会話を楽しみ、

機内食はすべて完食し、約十一時間後にミネアポリス・セントポール国際空港に到着しました。出発が遅れたため、私は次の乗り継ぎ便が心配でなりません。税関を通るのも心配でした。友だちからも、「女性一人での旅行だから税関を通るときはいろいろ聞かれるよ」と言われていたので、多少の心構えはしていたのですが、ニコリともしない税関職員を前にするとかなり緊張しました。

「何しにラクロスへ？」
「観光です……」
「え!? 観光? ラクロスへ?? たった四日の滞在で?」
ラクロスは観光地ではないので、観光と言ったことがかなり気になったらしく、滞在先についてもいろいろと聞かれました。怪しんでいましたが、なんとか納得してもらい通過できました。乗り継ぎの飛行機にも無事乗ることができ、約四十分後、最終目的地のラクロスへ到着しました。

「Welcome to La Crosse」の文字が見え、ほっと一安心。宿泊をお願いしていたトニーが空港へ迎えに来てくれていて、車で彼の家へと向かいました。トニーとは電話で話したあとはメールでのやりとりばかりだったのですが、ずっと前から



ら知り合いだったかのように、気楽に話すことができました。家に着くと早速私の泊まる部屋に案内してくれたのですが、部屋の中にはウェルカムボードを作ってくれていました。その優しさがあまりに嬉しくて、あとから小出しにしようと思っていたお土産をすべて出してしまいました。着いたのは夕方でしたが、まだ明るかったので町を案内してもらうことになりました。ラクロス全部を見渡せる高台に上り、夕陽の沈むミシシッピ川を眺めたりしました。以前トムから貰った写真では見たことがあったけれど、目の前の実際のラクロスは想像以上に美しい町でした。

ビル……生きてるの？

次の日、朝食をすませると、いよいよビルに会いにアパートへ向かいました。

ビルの住むアパートはトニーの家から車で十分ぐらいのところにあります。トニーは何度か訪ねてみたけれども結局会うことはできず、手紙も送ったけれども何の返答もなかったそうです。アパートに到着。玄関は施錠されています。インターホンで訪問先の部屋番号を押して来訪を告げると、相手が解錠してくれるようになっていきます。私はドキドキしながら部屋番号を押しましたが、応答はありません。もう一度、やはり、ありません。最悪の覚悟はしていましたが、いざ目の前にすると涙がこぼれそうでした。もう会えないんだと思つたとき、たまたま宅配の人が来て、鍵を

■ (上段) ラクロスの隣町、ラクセントで出会った巨大な壁画(ラケセント)。 (中段) ラクロスの近くにはオナカという、日本人にとつてはとて面白い名の町もあります。そこにつけた巨大魚と一緒に撮った写真。 (下段) トムの働くホテルで。中央がトム。右は同じ劇団員の同僚。



■(左)ハンバーガーショップで再会を果たしたビルと私。(上)ビールを飲みながら、ポツリポツリと、いろいろな話をしました。とてもゆったりとした時間でした。

開けてもらったので、私たちもその人の後ろについて入ってしまいました。ビルの部屋へ向かうと、……ドアに大きな花輪がかけてありました。

「やつぱり……ビル……」と思ったとき、どこからか音楽が聞こえてきました。耳を澄ますと、間違いなくビルの部屋の中からでした。けれどノックをしても反応はありません。

「なぜ？ なぜ？ 生きてるの？」

困った私たちは管理人さんに相談することにしました。すると彼はこう言ったのです。

「ああ、ビルはいつも音楽をかけたままでも出かけるんだ。きっとジョーンズバーガーだよ」

ビルは生きていました。ハンバーガーが食べられるぐらい元気なようです。管理人さんが店へ電話をしてビルがいることを確認してくれたので、私たちは早速その店へ向かいました。ガラス張りの店内に黄色いポロシャツを着た、おしゃれなおじいちゃんが見えます。間違いなくビルです。

ビルは私が本当に来

たことにすごく驚いていました。抱き合いい、涙を流し……というような再会ではなく、私たちはすぐに椅子に座って話し始めました。

ビルは歩くのは遅くなっていました。体が調子は良いようで一安心しました。その証拠に毎日ここへ来てビールを二杯飲むのが日課だと嬉しそうに話してくれました。二人でビールを飲みながら、家族のこと、劇団のことなどを話し、テレビに流れているフットボールの試合に夢中になって黙り、またポツリポツリと話をします。十年前と変わらない、とてもゆったりとした時間でした。

私は明日また会う約束をして店を出ました。そしてそのまま、トムの働くホテルへと向かいました。約束もせず会いに行つたのに、優しい笑顔で快く迎えてくれました。十分足らずのわずかな時間でしたが、ホテルでトムと一緒に働くもう一人の劇団員も交えて、すてきな時間を過ごすことができました。

笑顔でさよなら

次の日もジョーンズバーガーに行く。ビルは同じ席に座って待っていました。ビルは十年前の八雲国際演劇祭のときの記念バッグを持っていました。今でも毎日持ち歩いているそうです。そして、演劇祭のときに母と私が胸にぶら下げていた名札を大事そうにバッグから出して見せてくれました。演劇祭がビルの中でも大切な思い出になっていたのだ

す。そのとき、私は心から「来て良かった……」と思いました。

私は、もう会う機会はないだろうと思うと、別れるときは本当に悲しかったのですが、ビルはまるでまた明日も会うかのような感じで「さよなら」を言うので、おかしく笑ってしまいました。それがまた私たちらしくていいのかなと思いい、おもしろい手を振って別れました。

今、こうして振り返ってみると、まさにすべてが奇跡だったのだと改めて感じます。偶然の人との出会いがいくつも繋がって、私のアメリカ行きは成功したのだと思います。応援してくれた友人や、一人で行かせてくれた母、この旅で出会ったすべての人に感謝です！ また行きたい!!

(おんだ・じゅんこ／二〇〇四年英文専攻卒業)



■ビルは10年前の八雲国際演劇祭の記念バッグを大事そうに持ち歩いていました。中には……



■アイランドフェア
（ミクロネシア諸島
最大のお祭り）で、
水牛に乗りました。

グアムで働く

高橋知寿



■グアムを発つ前日のフェアウェルパーティーで、
友だちと。

冬のワシントン州から真夏のグアムに移り住み、夏バテ状態でしたが、次第に暑さにも慣れていきました。

グアムでの仕事

勤務先のアルパンビーチクラブはグアムで最大級のマリンスポーツ会社です。ジェットスキー、パラセーリング、バナナボート、シュノーケリング、イルカウォッチングを主に取り扱っており、多忙期には一日平均七〇〇名のお客様で賑わいます。場所はグアムの首都ハガニアにあるハガニア湾で、観光客で賑わうタモン湾から南に車で約一五分の所です。

仕事はゲストリレーションというポジションで、接客業全般でした。お客様の八割以上は日本人です。朝から昼にかけてはバスで到着するお客さんへのブリーフィングを担当しました。ブリーフィングでは、お客様の一日のスケジュールと各アクティビティの説明、海での注意事項の伝達、そのほかの様々な施設の案内などをします。多いときには一〇〇人以

私は二〇〇六年三月に島根県立短大の英文専攻を卒業し、その後、アメリカ・ワシントン州にある協力協定校のセントラルワシントン大学に留学し、スペイン語と観光学の勉強をしました。卒業が近づくと、就職先を考えるようになりましたが、留学で修得した英語や知識を試みたいと思い、卒業後は現地に就いて仕事をしたいと強く思うようになりました。アメリカの大学を卒業するとOPT (Optional Practical Training) ビザという一年間の就労ビザを取ることができません。このビザを取得し、経験を積んで日本に帰国しようと決めました。職種は観光業にスポットを当てました。

なぜ、グアムへ？

留学前から観光業には興味があり、学生時代は二度の夏を富士山五合目で過ご

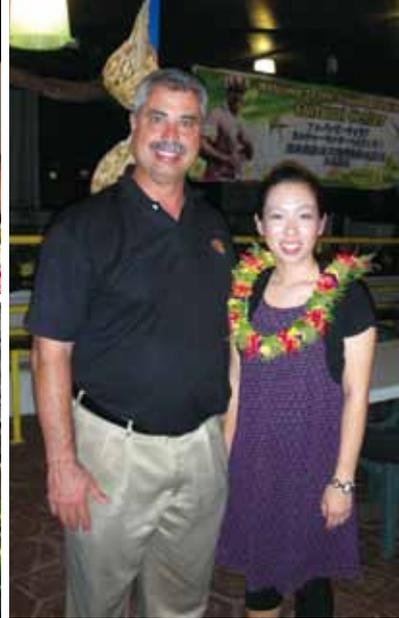
し、住み込みで働きました。そこで出会った世界各国からの観光客とのふれあいがとても楽しかったこともあり、アメリカでもリゾート地を中心に仕事を探しました。しかしリーマンショックの影響で就職活動は全く思ったように進みませんでした。履歴書を送っても送っても返信がなく、ただ時間ばかりが過ぎ去っていく中で、焦る気持ちがかんたん大きくなっていきました。

OPTビザの規制で、仕事を見つけないとあと三週間後には強制帰国させられ

てしまうという時期になり、半ばあきらめて日本への帰国も考え始めたころ、グローバルキャリアアドバイザーという派遣会社を見つけました。海外で働きたい日本人に仕事を紹介している会社です。調べると、ハワイやグアムといったリゾート地での仕事の募集がいくつかありました。この会社と連絡を取り、ビザの都合で期限が迫っていることを説明したところ、グアムのマリンスポーツ会社がすぐに面接してくれるということでした。履歴書と書類を送ると、すぐに面接の日程が決まり、二度の電話面接で合格通知をいただきました。

ビザの切れる一週間前に仕事が決まったのです！三週間後にはグアムに来てほしいということだったので、日本に送るうとしていた荷物をすべてグアムに送り、自身もグアムに飛び立ちました。真





■ (右) アルパंचीクラブのフェアウェルパーティーで、社長さんと一緒に。(左上) フェアウェルパーティーで、同僚と。(左下) アイランドフェアの生活体験コーナーで、原住民の挨拶を受ける。

上を前に説明をしなければなりません。今まで人前で話すことが苦手だった私ですが、業務上避けられないので、毎日ドキドキしながら仕事場に向かっていました。それが数か月後には楽しんでできるようになっていました。

自分が楽しんで仕事ができるようになったところから、お客様とのコミュニケーションももうまくとれるようになり、少しずつですが臨機応変に対応することができるようになりました。ただ八〇人近くいる従業員のうち日本人は私を含め三人だったので、日本人客の望むきめ細かいサービスは行き届いていなかったた

め、クレーム対応に追われたこともあり。そのため閑散期になると、現地の従業員は仕事の後に日本語や日本の接客業について学び、よりよいサービス提供に努めています。

お客様に一日楽しんでもらったあとは、リザーベーションオフィスでの予約業務、パラセーリングやイルカウォッチングのスケジュールの組み立て、バスの送迎の確認など、次の日の準備を行います。このような感じで慌ただしい毎日を送っていました。

グアムでの生活

グアムは日本から飛行機で約三時間半、時差は一時間で、日本から一番近いアメリカです。人口一六万人の約半数が原住民のチャモロ人、他はフィリピン、中国、韓国、日本、アメリカ、東南アジアから移住してきた人々で、多文化共生の島です。

一年を通して平均二七度の常夏の気候なので年中海で泳げます。エメラルドグリーン of 遠浅の海が続いていて、カラフルな熱帯魚を間近で鑑賞することが出来ます。私が最も感動したのは野生のイルカです。少し沖に出るとたくさんのかわいい野生のイルカがいます。ウミガメも見ること

ができました。グアムの繁華街から三〇〜四〇分車を走らせると、まだ手つかずの自然も多く残っており、ハイキングコースもたくさんあります。

仕事は週休二日制でした。休日はビーチで過ごし(アパートの目の前がビーチでした)、シヨッピングへ行ったり、BBQ、ホームパーティーに参加したりと、のんびりとした日を過ごすこともあれば、ビーチバレーをしたり、ハイキングへ行ったりと、アクティブに活動することもありました。

ハイキングは特に好きで、観光客の来ない現地の友達オスメのスポットに登りに行っていました。ジャングルの中のハイキングはともスリルがあり病みつきになります。ビーチバレーはチームを作っていたわけではなく、週末、ビーチバレーのコートに行けば誰かがいるので、「初めまして」で仲間に入れてもらい、ストレスを発散して楽しんでいました。現地の人はみな気さくですぐに仲良くなれます。

ルームメイトについて教会に行ったりしたことで友達が一気に増えました。グアムに来たときは、知り合いが一人もない状態でしたが、今ではたくさんの人と連絡を取り合っています。島国なのでとても物価が高く、食事は



自炊をしていました。日本の食材は高級品で手が届かなかったため、中国製や韓国製の食材を使って料理をしていました。毎週日曜日には隣町で朝市が行われていたので、野菜などはその市場で新鮮なものを調達していました。

グアムで働いたのは実質八か月ほどでしたが、この短期間で一回り成長できたと思います。二〇〇九年一〇月にビザが切れて日本に帰ってきてからは、アルパंचीクラブの営業アシスタントとして日本の関東・北陸から九州までの営業に同行させてもらっています。

現在、会社の方が就労ビザの延長を申請してくれているので、ビザがおり次第、またグアムに戻って働く予定です。これからも自分の道を切り開いて前進していこうと思います。(たかはし・ちず／二〇〇六年英文専攻卒業)

■ (上段) 空の散歩、パラセーリング。30〜50m上空まで上がる。(下段) ビーチバレーを楽しむ。

震災後のみちのくのくで

小泉 凡

五月の連休に、仙台と石巻を訪ね、お見舞いの気持ちを込めて「みちのく八雲会」の皆さんと懇談してきた。同会は二〇〇二年設立。津波から人々を救った庄屋の物語「稲むらの火」(原作者・小泉八雲)の紙芝居(昭和十七年制作)をDVDにして宮城県内の小学校に配布する活動をしてきた。

震災後、自分にできる支援はないかと考え、同会の門間代表と相談した。「被災した会員がたまにはまともな服に着替えて食事にも行くか。そんな気もちにさせて欲しい」と言われる。それでお役に立てればと思い、わずかな義捐金と松江の銘菓、それに被災地で喜ばれるお茶とコーヒーを、八雲会員の協力を得て、キャリアバッグに目一杯詰め込み、みちのくを目指した。

*

五月三日午後、新宿の新南口から高速バスに乗り仙台をめざす。しかし出発前に「東北道は断続渋滞百キロなので、常磐道を迂回したいが、放射能が気になる方が一人であれば東北道を行く」と説

明があった。一瞬、びくっとして福島県の地図を頭に描く。常磐道をいわきまで北上し、そこから磐越道を北西に向かうルートだ。冷静になって考えれば、一番原発に近い、いわきジャンクション付近でも五十キロ位離れていることを思い起こし、安堵した。結局誰も反対しなかったので予定通りの迂回ルートを進んだ。

水戸の手前から道はパッチワークのように継ぎ接ぎとなり、ものすごい振動が体に響く。日立を過ぎると、太平洋が顔をだし、同時に段丘の上を走っていることに気づく。福島県の浜通りを通るのは約十年ぶりで地形のことをすっかり忘れていた。この段丘地形がしばらく続いた後、福島北端部から仙台のあたりまで海岸は平坦な砂浜となり、仙台以北はリアス式海岸に変わる。

このたびの被災地には三つの異なる地勢があり、津波被害も地形によってだいぶ違ったようだ。福島原発はこの段丘地形の場所にある。でもせつかく標高四十メートルもある天然の丘を削って、海面に近い位置に掘り下げてつくられて

いる。台地を生かせば、津波の被害はなかったはずだ、などと想像しながら、雨脚が強まり夕暮れがせまる阿武隈山地を北上する。

たっぷり時間を浴びて夜の九時前に長町駅前に着く。ここから仙台市営地下鉄でホテルの最寄り駅をめざす。第一印象は「街が明るい」だった。首都圏は地震以来、駅も車内も街も暗い。下りのエスカレーターは原則、ロープが張られ使用中となつている。仙台では、双方方向のエスカレーターが動き、灯りは全開に近い。もちろんライフラインがすべて復旧している今だからこそ明るいのだろうが、皮肉な気がした。街が元気を取り戻している印象だ。

*

五月四日朝、石巻をめざす。まず、ホテルから仙台駅までキャリアバッグをころがして歩く。昨夜の印象は、思い過ぎだったことが早くも判明する。JR仙台駅全体がまだシートで覆われ、中に入ると天井にもビニールシートが被せてあった。オープンしている飲食店も、ガラスの扉にはガムテープで補強がしてあ



■南浜地区の墓地。墓石を起こしてこけしを供養する風景がある。



■みちのくの玄関、JR仙台駅。シートで覆われている。



■(上段)石巻行きのバスを待つ長蛇の列。(下段)JR石巻駅。

が空っぽで出発していくのを横目で見ながら、何で臨機応変な対応ができないだろうかと情けなく思う。宮城交通だって被災者なのだから、ここは行政がもう少し他県から借りてでも動かすべきではないのか。

*

被害の少なかった郊外のショッピングセンター・石巻イオンに門間代表を含め八名の会員の方が参集してくださいました。そのうち六名

る。夜はそういった風景が隠され、ただ照明の明るさかりだけが際立っていたのだ。やはりここは被災地だった。

石巻や牡鹿半島へは三陸道を通る高速バスが実際のところ唯一の移動手段だ。東塩釜まで開通したJR仙石線に乗り、代行バスで石巻をめざす方法もあるが、国道四五号線は「低速駐車場」と化しているの、これは論外の方法だ。

石巻行きのバス停には発車まで三十分以上あるのに、支援物資を両手にさげた人たちが五十人ほどが列をつくっていた。その行列は瞬く間に二百人近くにも達した。でもバスは一台しか来ない。それも震災前のダイヤで運行している。幸い、私は五十一人目で補助席の前から五番目に座れた。でも百五十人近くが乗れずに一時間後のバスを待つことに。怒り出す人もいる。福島行きや一関の行きのバス

までは家も車も失われている。食事をしつつうかがった壮絶な非難体験を以下に抜粋して紹介する。

「地震当日、石巻線の渡線橋の上で吹雪の中、娘と手をつないで一夜を明かした。通りかかった鮮魚トラックが中身を捨てて、発泡スチロールで囲いをこしらえ、仮設トイレを作ってくれた」

「第一波で家が倒壊し、五匹の猫を失った。ベソをかきながら、夫と山路を避難した。姉の嫁ぎ先をめざしたが、暗くなってきた。心細くなり、まるで曽根崎心中だった。通りかかった車に手をあげると若い青年で、どこまでも送ると親切だった。でも彼はガソリンも食料もほとんどなかったので地震直後にコンビニで買ったおにぎりをあげた。親切なコンビニの店員はその五分後に津波で流されたはず。そのことを思い出すと悲しい」

「私は昭和二十三年三月十一日生まれ。夜には誕生日を祝ってもらはずだった。だから三月十一日は私にとってリセットの日」

「嫌いだっただ人が死んでこんなに悲しい。生き方を変えなければと思った」

「近くの学校の三階に避難した。窓にSOS一六〇〇人と書いた。自衛隊のヘリが降りてくれた。三日間食べ物がなかったが、女子高校生がお金を出し合ってお菓子を差し入れしてくれた。嬉しかった」

心温まる美談も聞いた。「転居届を提出したわけでもないのに、

自宅あての郵便物が避難先の実家に届けられた。近所の人に訊いて届けてくれたのだろう。日本人は何と勤勉で親切！」

「行政はとりあえず犠牲者の遺体を土葬して、後日あらためて火葬することに決定。棺を十体並べて、まとめて供養する予定だったが、若い僧侶たちが、『それはない！十秒でもいいから一人ずつお経を！』と宗派を超えてネットワークをつくって行政に陳情し、個人供養を実現させた」

「イギリスの支援チームに、皇太子の結婚式で帰らなくていいのですかと尋ねると『被災地支援の方がずっと大切だ』

といわれ涙が出た」

「三月十一日を境にみんながやさしくなった」

「瓦礫から掘り出された遺体の中に、赤ちゃんを抱きしめたままの母さんがいて、石巻市民は涙した」

松江・大雄寺に伝わる、墓中で出産した母が、幽霊となって水飴で子育てをする「子育て幽霊」の怪談を思い出した。ハーンはこの怪談の再話を「母の愛は死よりも強し」で結び、「怪談には必ず真理がある」と説いた。時空を超えた真理(truth)が本当にあったのだと感



■石巻。みちのく八雲会のメンバーの皆さんと。

じた。

*

その後、二人の会員の方の案内で被害の大きかった南浜地区へ入る。見渡す限り瓦礫の原野だ。かつて恐山と佐渡島の願^{ねが}いで見た賽の河原の風景と原爆投下直後の広島の写真と同時に思い出した。まず日本製紙の工場跡へ。建物の面影さえ全くない。「日本製紙」という看板が辛うじて傾きながら残っている。東日本の新聞や雑誌の紙を、多くここから供給していた。首都圏の新聞はすでに薄くなりはじめている。

行く手には廃墟のような小学校が見える。真つ黒にコンクリートが焦げていた。津波で流された何台かの車が学校の前でぶつかりあって炎上し、類焼したのだ。そこに隣接する墓地では九割型の墓碑が倒れていた。でもそれを起こして地蔵やけししを奉納する風景がみられた。祖先信仰の強さに心を打たれた。

そこで出会った自衛隊員に訊ねると、半ば諦め顔で、あと一か月でこの風景を変えたいと、希望的観測を語った。この先

の渡波^{わたのな}地区では、地盤が八十センチも沈下したため、大潮の今の時期は、日中は浸水するため、集落全体が避難している。まだまだ平穩には戻れない現実を目の当たりにした。

さらに、門間代表のふるさと、東松島市の野蒜^{のびる}へ向かう。驚いたことに、この付近ではJR仙石線の線路や駅や踏切が痕跡さえもなくなっていた。門間さんもお実家を失われた。海岸の美しい松林はルイジアナのバイユー(沼沢地)のごとく濁った湿地と化していた。しかしそこから蛙の声が！新しい命の力強さに嬉し涙が溢れる瞬間だった。

仙台にもどると喉の痛みを覚えた。瓦礫の中の空気を吸い込んでしまったせいだろう。南浜で出会った自衛隊員が、皆、スリーエムの防毒マスクをしていた意味が領けた。

*

五日、仙台では八人の会員の方にお会いした。「稲むらの火」のCD作成時にナレーションを担当したアナウンサーの高杉さんのお話。「地震当日、海岸に近い宮城野区で新社屋オープンのためにセレモニーの司会をしていた。その社屋は一時間後に津波でなくなった」。

松江の八雲会が三月末の時点で、ウェブ上で募った義捐金をみちのく八雲会に送金したところ、その一部で門間代表はただちに洗濯機を購入し、会員がリーダーをつとめる石巻高校の避難所へ運び込む。三二人分の洗濯にフル稼働した。



■八雲会の義捐金で買った洗濯機。

石巻は次の復興段階に入ったため、その後洗濯機は気仙沼の避難所で活躍している。日本赤十字や行政に寄せられた義捐金は、六月上旬時点でまだ三割しか還元されておらず、七割はプールされたままだ。住民の不満が募っている。

みちのく八雲会には、他にも、昨年の「ハーンの神在月―小泉八雲の会&ミュージアムの未来を考えるサミット」に松江に集った各地の関連団体から支援の手が差し伸べられている。緩やかなネットワークが自然に形作られたのだと想像する。サミットの成果が機能したことがわかり、とても嬉しい。

気になるのは、被災地の行政と避難所運営や被災地支援の実務に携わるNPOとの温度差だ。みちのく八雲会には門間代表はじめ、NPOのリーダーや避難所

運営に携わる会員が多くいる。最近では、行政から面会さえも拒否されると不信感を露わにする。ボランティアの不足も悩ましい。避難所暮らしが長く続いた子供たちは、夜泣きやおねしょで「周囲に迷惑がかかる」と親に叱られ続け、萎縮していつそう不安定になっている。時々西日本の大学からやってくるボランティア学生が避難所を訪れると、子どもたちは抱きしめて離さない。その写真をたくさんみせてもらった。思いきりハグし、遊んでもらえるお兄さん、お姉さんが真に求められている。とにかく、今、間接的でもいいから自分の立場でできる支援をするしかない」と改めて強く思った。

*

「痩せたたくても痩せられなかったのにみんな痩せちゃたね」でも、「きれいさっぱりなくなってますっきりした。ものを追いつめる価値観は自然になくなった」と、石巻で出会った六十代の人たちは、あつけらかんと口にされる。複雑な思いを受け止めて帰松したが、私自身は出発前より精神的に元気になったような気がする。それは、生死の境を生き延び、力強くシンプルライフを送る、人間本来の営みのあり方を垣間見たからだろう。

(こいずみ・ぼん／総合文化学科教員*民俗学)



■東松島市野蒜地区。美しい松林は沼沢地に。

石巻に のんびり雲の かかる日

岩田英作



■石巻に持っていった絵本たち。

二〇一一年六月十八日、十九日の二日間、宮城県石巻市内の避難所を訪れ、子どもたちに絵本を届け、読み聞かせの活動を行なった。島根県立大学松江キャンパスには絵本専門の図書館「おはなしレストラライブラリー」がある。このライブラリーでは、西日本から被災地の子どもたちに絵本を届ける活動を四月から行なってきた。多くの一般の方々から四千冊を超える絵本の提供を受け、仙台のNPOを通じて東北地方の被災地に届けることができた。この活動に取り組むうちに、絵本を送るだけでなく、自分

自身、被災地に行つて子どもたちと直接向き合い、絵本を読みたいと思つたようになった。そんな折、先行して被災地を訪問された小泉凡先生のご助力を幸い得ることができて、今回の石巻行は実現した。

読み聞かせよりも

僕が現地でお世話になったのは、NPO石巻こども避難所クラブ「にじいろクレヨン」代表の柴田滋紀さん。柴田さんご自身も家が流され避難所生活を経験した被災者のひとりだ。柴田さんは画家で、四月には仙台市内で個展を開催する予定

だったが、津波で描いた絵がごっそり流されてしまい個展どころではなくなくなってしまった。石巻での二日間は、柴田さんのほかに、ボランティアで来ていたアメリカ人の女性ふたりと同行した。ひとり

は東京の英会話教室で教えている二ナさん、もうひとりは大阪大学で日本の近代文学を学んでいるローラさん。二ナさんは、石巻での支援は今回で二度目ということだった。ふたりは小さな部品をた



■石巻駅前では柴田さん（右）と。

くさん持つてきていて、それらを組み合わせると、人形や綺麗な飾りが出来上がるのだった。避難所の子どもたちも、特に女の子たちが夢中になって部品を組み合わせていた。僕も子どもに混じつて犬を一匹こしらえてみたが、それがなんともさえない表情の犬になってしまつて、二ナさんから「へんな犬ね」と笑われてしまった。

石巻市内にある避難所は僕が行つた時点でも九十箇所以上にのぼる。そのうち、四人が二日間でまわつたのは被災者宅も含めて九箇所、最初に向かったのは石巻高校内にある避難所だった。僕の事前の想像では、大勢の子どもたちを前に絵本を読み聞かせるシーンをイメージしていたのだが、現実はそのうわけにはいかなかった。この日は震災で亡くなった方々の百ヶ日の法要にあたり、石巻でも大きな慰霊祭が催され、避難所の方々の多くもそちらに出かけておられるということだった。部屋の中には子どもの姿が見えず、すると校庭に三人のちびっ子がいた。見つけるやいなや柴田さんが走りだし、いきなり追いかけてこの始まりで



■子どもたちと遊ぶ二ナさん（右）とローラさん。



■（上段）石巻で最初の読み聞かせ。（下段）少年と風船のキャッチボール。後方右手、筆者。

ある。さて次は肩車、次はサッカーと、事の成り行きに戸惑いながら、絵本を入れたトランクはとりあえず校庭の隅に置いて、汗まみれ砂埃まみれで走り回った。二十さんとローラさんのふたりも、もちろんいっしょだ。子どもは至近距離から遠慮なくボールを蹴るものだから、それが時々からだにあたって、ふたりは大騒ぎをしていた。「この子に絵本を読んでもやってください」柴田さんは絵本を読めないでいる僕を氣遣って、ひとりの男の子を連れてきてくれた。さて、いよいよ石巻で最初の読み聞かせである。僕が読み始めると、男の子も喜んで聞いてくる。次第にこちらにも調子が出てくる。と、次の瞬間、男の子はボール蹴りをして仲間のものとへ走り去った。僕は読み終わっていない絵本を閉じた。

その後まわった避難所でも、基本的にはこれと似たり寄ったりだった。僕は子どもたちと走り、つかまえてこちよこちよをし、ボールを蹴り、投げ、ぶつけ

られ、また追いかけてまわし、そしてほんのひととき、絵本を読んだ。僕はかなり早い段階で絵本の読み聞かせにこだわることはしなくなった。子どもに無理やり絵本をおしつけるなんて馬鹿げているし、それに、絵本を介さなくても、子どもたちと僕のあいだに何か通い合うのを感じる事ができた。子どもが風船に水ををはちきれんばかりに入れて投げたよす。受け取った僕の手元で水風船が破裂しシャツが水浸しになる。子どもが大笑いをし、僕もこらと言いながら笑った。それでよかった。

突然風景が変わる

石巻に向かった初日のことだ。仙台市内からバスで石巻に入り、最初の停留所があるイオン石巻ショッピングセンターが見えてきた。松江のイオンよりもはるかに大きな施設である。乗客の多くがそこで下車する。若い女性が多い。時間帯からして、イオンで働いている人たちだろう。僕はある違和感を覚え始める。こゝは石巻である。なのに、眼前の風景は、それがたとえば松江であつてもちつともおかしくないくらいに日常的なのだ。終点のJR石巻駅前に到着する。道すがら、ガラスの割れた店やコンクリートがめくれあがつた舗道を目にしたが、違和感が払拭されたわけではなかった。それほど



■海岸沿いは、この風景が延々と続く。

に駅は駅として機能していたし、駅前の往来もそれらしく見えた。駅一帯が津波の水に覆われ、完全に水が引くまでには二週間かかったと、あとで柴田さんから聞いたが、その風景を想像してみるの易しいことではなかった。

四人は、こちらの避難所からあちらの避難所へと、通行可能な道路をこまねずみのように車で走りながら、二日目の正午、その風景は突然我々の前に現れた。海に向かって道をゆるやかに下っていくと、町が消滅し、人影のなくなった、殺伐とした風景が広がった。石巻に来たからにはそれから逃れることはできないと、ある程度の覚悟をしていた風景。僕は、それを目にしたときの心境を表現しようとしてみても、うまく言葉にすることができない。僕はどちらかというところに着いていた。ただ、その落ち着き方が、いつもの落ち着いている状態とはあきらかに違ったのだ。喜怒哀楽を失ってしまったような落ち着きとも呼べばいいのだろうか。僕が写真を撮ってもいいかど尋ねると、柴田さんは運転しながら「もちろんです。伝えてください、これを」と言った。

前を向いて生きる

それからしばらくのあいだ、車は無言の四人を乗せて、その風景の中を進んで行った。柴田さんが案内してくれたのは、彼の家があつた場所だ。僕たちのほかに、石巻子ども避難所クラブを支援する仙台市内の歯科医のみなさんもいっしょだった。「ここが玄関、のあつた場所です」柴田さんがそう言うと、一同、そこから「お邪魔します」と言つて敷地に入った。そこは北上川の河口にほど近い場所だ、地震直後、川の水がすさまじい勢いで海に向かって引いていくのを見て、柴田さんには津波が来るのを確信したという。川の彼岸も此岸も、あたり一面、焦土のようである。二〇一一年三月十一日に、ここで起きた事。石巻市、死者三二五〇人、行方不明者八九〇人、全壊一九〇六五棟、半壊三三五四棟。八月一日時点の宮城県 の発表である。

柴田さんの家は、ほかの流された家と違つて、なぜか床板だけは見事に残つていた。柴田さんは、なんとその上で昼食を食べようというのである。私たちは、床板のみの柴田家で輪になって弁当を広げながら、震災当日の様子について柴田さんから話をうかがった。柴田さんの口から語られるのは、まさに阿鼻叫喚の地



■ (上段) 柴田さんの家の跡には、教えていた子どもの絵が1枚だけ残った。(下段) 柴田さん(右)の家の跡地で話を聞く。

獄絵である。津波との生きるか死ぬかの追いかけて、避難した小学校の出火、学校裏山への橋桁を渡しての避難、老人や子ども、けが人を背負っての小学校と裏山の往復、知らないあいだに自分の体から流れ出る血、壁の向こうに誰かいるのは分かっているけれども助けられなかった無念さ……。

僕はここで柴田さんの体験をこれ以上書くことはやめようと思う。石巻こども避難所クラブのブログにそのことは詳しく書かれているので、できればそちらを読んでいただきたい。僕は柴田さんの話をうかがいながら、その内容もさることながら、彼の語り口に強い印象を受けた。なぜなら、柴田さんは、この上なく重い話を、なんとも飄々と、気負うことなく語っていたからだ。「二度、死にかけてました」彼はそれを、まことにさりげなく言っ

そう思った。彼は振り返るだけではない。しつかり前を向いている人なのだ。そうも思った。被災してまもない時点から避難所の子どもたちの支援に立ちあがり、にじいろクレヨンの仲間と共に連日避難所を奔走する彼を支えているものを、僕は見た気がした。

『はじめてのおつかい』と女の子

四人が最後に訪れたのは、柴田さんの高校時代の同級生宅だった。家の壁には、津波が達した跡がくっきりと付いている。中に入ると、同級生の男性のお子さんをはじめ、六人の子どもたちが集まっています。僕はそこで、石巻で初めて読み聞かせらしい読み聞かせをすることができた。僕は子どもたちの「もつと読んで」という声に答えて、三冊の絵本を立て続けに読んだ。柴田さんも、よかったですねという表情をしていた。その後、僕と同級生の男性を残して、みなは外に遊びに行き、僕は男性から震災の日のことをうかがった。「すべてが終わったと思うた」という彼の壮絶な体験の中で、僕はこんな話も聞



■ (上段) 夕暮れ間近の避難所で読み聞かせをする柴田さんと仲間。(下段) 車で移動しながら、いろんな話を柴田さんからうかがった。

いた。彼の家族がいた避難所では、トイレが汚物で溢れて使えなくなった。そのとき、中国人の避難者が手で汚物を掬い取り、ふたたび使えるようにしてくれたのだという。

帰りの車の中で、柴田さんは、同級生宅にいた子どもの中の、ある女の子について話をしてくれた。十歳になるその女の子は、もともと母子家庭だったが、お母さんが津波で命を落とし、今は祖母と二人で暮らしているということだった。僕が読んだ三冊の絵本の中には、『はじめてのおつかい』(文・筒井頼子、絵・林 明子)があった。とてもポピュラーな絵本なので、ご存知の方も多だろう。お母さんに頼まれたみいちゃんが初めてひとりでおつかいに行き、心細い思いをしながらなんとか買物を終えて家路に着くと、坂の下でお母さんが待ってくれている、というおはなしである。母を亡くしたというその女の子は、いったいど

んな思いでその絵本を聞いていたのだろう。そのことが、少し気がかりだった。

石巻行から二ヶ月が経つ。僕はいつもの生活に戻った。そして、時ど

き、石巻のことを思い出す。

僕は石巻に履いていったシューズを帰ってから一度洗った。しかし、ふとした拍子に、シューズの中から小さな砂が出てくることもある。そんなとき、石巻の子どもたちと汗と砂にまみれて駆け回ったことを思い出す。

それから、夏の青空を見ていると、柴田さんの家の跡地で弁当を広げながら見上げた空を思い出す。そこには清々しく青空が広がっていて、それは、地上のありさまとくらべて、なにか理不尽のようでもあったし、同時に、おおきな励ましのようでもあった。

いま、石巻にも夏が訪れ、突き抜けるような青空が広がっているのかも知れない。そこに湧いた人道雲を、ゆったりと、のんびりと、眺めることのできる日が、一日もはやく訪れますように。

(いわた・えいさく/総合文化学科教員*日本近代文学)